

115 体外受精における抗リン脂質抗体の検討

秋田大

加藤充弘, 児玉英也, 松井俊彦, 武田志保,
吉岡知巳, 関根和子, 真木正博

〔目的〕自己抗体が異常なレベルまで上昇して生殖現象が傷害されるとする概念 (Gleicher, 1987) が提唱されている。そこで不妊患者に認められる抗リン脂質抗体の存在が、体外受精の治療成績に影響を与え得るかを検討した。〔方法〕体外受精施行 129 例の、女性患者血清中の抗リン脂質 (cardiolipin, phosphatidylserine, phosphatidylcholine, phosphatidylethanolamine) 抗体を、ELISAにより測定し、吸光度が Mean + 1.5 S. D. 以上を陽性とした。患者を抗体陽性群と陰性群で別けて、体外受精の成績を比較検討した。〔成績〕抗体陽性例は 129 例中 20 例 (15.5%) 存在した。不妊因子別での陽性率は、卵管因子 10.7% (6/56), 子宮内膜症 33.3% (8/24), 男性因子 5.6% (1/18), 免疫因子 37.5% (3/8), 原因不明 8.7% (2/23) であった。体外受精の治療周期を、抗体陽性群 20 例 29 周期と抗体陰性群 100 例 121 周期で比較検討した結果、両群の平均採卵数 (7.9 ± 4.7 vs 7.3 ± 4.8 個, Mean $\pm$ S. D.), 平均受精率 (64.7 ± 22.5 vs 70.5 ± 24.6 %), 平均移植胚数 (4.0 ± 1.6 vs 3.5 ± 1.8 個) に差は認められなかった。両群の妊娠率は、移植周期当たり 31.0% (9/29) vs 31.4% (38/121), 流産率も妊娠周期当たり 22.2% (2/9) vs 21.0% (8/38) で有意な差は認められなかった。また、抗体陽性群において治療の予後に関連する特定な抗リン脂質抗体は認められず、抗体価の値との関連も認められなかった。〔結論〕従来の報告どおり、抗リン脂質抗体は子宮内膜症患者、免疫不妊患者に高頻度に認められた。しかし、抗リン脂質抗体の存在は、着床率の減少、流産率の増加などの原因として有意なものではなく、体外受精の成績に明らかな影響は及ぼさないものと考えられた。

116 抗リン脂質抗体がトロホブラスト増殖に及ぼす影響

鹿児島市医師会病院

岩元一朗

〔目的〕抗リン脂質抗体 (抗 PL 抗体) は習慣流産 (習流) 例で高頻度にみられ、流産への関与が示唆されるが、その機序は不明のままである。今回、Trophoblast (Tr) の single cell を得、培養 Tr 細胞の増殖に与える抗 PL 抗体の影響をみた。〔方法〕正常妊娠初期の人工中絶時に患者の同意の下に採取した絨毛より Tr single cell を得た。Tr の存在はその形態、hCG 産生及び酵素抗体法にて確認した。実験に用いた血清は習流で抗 PL 抗体陽性例 6 例 (陽性群), 習流で抗 PL 抗体陰性例 2 例 (陰性群) 及び習流で夫リンパ球注入療法を施行し、妊娠継続に成功したが抗 PL 抗体が陽性化した例 3 例 (リンパ球群) である。passage 3 の Tr cell を 2×10^4 /well の密度で 96 well の microplate にまき、medium で 12.5% に調整した陽性群、陰性群、リンパ球群の血清及び control として 12.5% FCS 添加の medium をそれぞれ加え、3 日間培養し ^3H -thymidine uptake でその増殖に与える影響をみた。stimulation index (S. I.) を (血清添加 cpm - FCS 添加 cpm) / FCS 添加 cpm の式で算出し、各群の平均値 (mS. I.) を求めた。〔成績〕①ヒト血清添加では FCS 添加例よりも Tr の増殖が促進された。②血清添加による Tr 増殖亢進作用の強さは、陰性群 (mS. I. = 0.66), リンパ球群 (mS. I. = 0.57), 陽性群 (mS. I. = 0.26) の順であった。尚、リンパ球群では添加血清の Tr 増殖亢進作用は濃度依存性に増大した。〔結論〕①抗 PL 抗体が Tr の増殖を抑制することにより流産がおこる可能性が示された。②習慣流産へのリンパ球注入療法では、たとえ抗 PL 抗体が陽性化しても他の液性因子が Tr 増殖の方向に作用し、抗 PL 抗体による増殖抑制作用が弱められることが示唆された。